

自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅷ(3) ——幼児期に自閉症と診断され、後に修正された例について——

肥後 祥治* 加藤 哲文 藤田 直子** 小林 重雄

他機関において「自閉症」と診断を受けたが、治療の過程で自閉症状が改善した5名（特殊学級在籍3名、普通学級在籍2名）に対する就学後9年目の追跡研究である。本報の目的は、知能・社会生活能力の検査、母親及び担任教師との面接の結果より、中学入学の際の措置の適切性について検討を加えることであった。結果から次のことが明らかになった。①特殊学級在籍者2名、普通学級在籍1名は措置が適切であったと考えられる。②普通学級在籍の残り1名は、適切な対人行動の訓練の必要性が示唆された。③特殊学級在籍の残り1名は、社会生活能力の退行が見られたが、今回の研究からはその原因は明らかにできなかった。

キーワード：自閉症児 追跡研究 学校適応 行動療法

1. はじめに

われわれは、1979年以来（近藤ら、1979）T大学知能障害研究室で行動療法的指導を受けた子供達の追跡研究を継続してきた。当時は小学校に入学したばかりであった彼らも、既に中学校3年生になり、1つの大きな節目を迎えようとしている。その間行われた追跡研究の中で様々な問題点が指摘されてきたが、今後この問題がいかに解決あるいは変化して行くかを追跡して行くことは、非常に有意義なことであると考えられる。またこの作業は、短期間ではその効果や問題点を確認し難い知能障害児の臨床において、そのプログラムの妥当性を検討する機会や、次なる進歩へのヒントを提供してくれるものと思われる。

2. 目的

本研究では、他機関で「自閉症」と診断されたが、小林（1980 a, b）の教育的診断基準によりその診断が棄却された5名を対象に、中学3年時の学校適応に関する追跡調査を行い、小学6年時のデータと比較しながら検討することによって、現

状を明確に把握し、措置の適否について検討することを目的とする。

3. 方法

(1) 対象児

5名の対象児（イニシャルは近藤ら、1979と共通）のプロフィール、訓練経過、就学状況及び中学時の入学状況は、Table 1に要約した。

(2) 調査内容

本研究では、以下の3つの項目に関するデータの収集を昭和61年8月から11月（1986）にかけて行った。

- ① 言語性及び動作性知能
- ② 社会生活能力
- ③ 学校及び家庭での生活

①に関しては、田中ビネー知能検査、数研式ピクチャーブロック検査（PBT）、人物画知能検査（DAM）、②に関しては、S-M社会生活能力検査、③に関しては、親・教師に対するインタビューをそれぞれ行った。なお、K.Yと、M.Sは、諸事情により、インタビュー以外のデータが収集できなかった。

* 心身障害学研究科

** 東京都立多摩療育園

Table 1. 対象児の概要

	T. M	K. Y	M. S	M. N	H. T
性別・生年月日 主 訴	男子1971. 2 ・ことばの遅れ ・落ちつきがない	男子1971. 9 ・仲間に入れない ・落ちつきがない ・ことばが少ない	男子1972. 3 ・ことばの遅れ ・対人関係の障害	女子1971. 8 ・ことばがない ・落ちつきがない ・尖足歩行	男子1971. 8 ・ことばが出ない
インターク 訓練期間 訓練経過	1976. 9 (4:9) 1年5カ月 1976. 9~1977. 4 パズル, 円柱さし, 線引き。 1977. 4~1978. 2 発音, 文字読み(個 別)。 サーキット, 電車 ごっこ, 綱引き(小 集団)。	1976. 4 (4:7) 1年10カ月 1976. 6~1978. 3 書字, 数概念, 読 み。 絵画(個別)。 小集団学習。	1977. 5 (5:2) 10カ月 1977. 5~1978. 3 ことばの学習(あ いさつ語, 助詞), 文字, 文構成(個 別)。	1975. 6 (3:10) 2年9カ月 1975. 6~1977. 3 円柱さし, パズル, 絵カードマッピン グ, 発声・発語訓 練, 絵カードの命 名, 動作・音声模 倣。 1977. 4~1978. 3 色・形・大小弁別, 記憶, トレーシン グ, 音声と文字の マッピング。	1977. 4 (5:8) 10カ月 1977. 4~1978. 2 発語訓練。 数概念。 トレーニング。
訓練終了時	ひらがな, 数字の 読み可。 概念学習課題可。 文字は書けない。 飽きたり要求が通 らないと泣きや独 語がでる。	他者との会話が可 能。 課題への集中がよ い。 行動, 言語面で著 しい進歩	個別学習に集中し て取りくむことが 可。 基本的会話が可能。 助詞の欠落, 疑問 詞の理解不可。	訓練中着席可, 絵 カードの命名, 音 声・文字による絵 カード弁別可。 トレーニングは不 完全。 尖足歩行は改善さ れない。	単語による, いく つかの会話が可。 基本的指示理解可。 トレーニングは可 能であるが描画は なぐりがき。
就 学	普通学級(介助員 なし)。 4学年より週3時 間, ことばの教室 へ通級。	普通学級(担任に 障害や就学前に指 導を受けていたこ とを知らせていな い)。	普通学級。 週2時間, 情緒障 害学級に通級。	特殊学級。 部分的に普通学級 への参加。	特殊学級。 部分的に普通学級 への参加。
中 学 校	特殊学級	私立中学校普通学 級	普通学級	特殊学級	特殊学級
入 学 状 況	集会・行事は普通 学級に参加	(同上)		体育・行事は普通 学級に参加	集会・行事は普通 学級に参加
診 断 名	精神発達遅滞	微細脳機能障害	微細脳機能障害	精神発達遅滞	精神発達遅滞

4. 結 果

結果は, 小学6年時との比較, 中学3年時の状況に分けて記述する。

(1) 6年時との比較

小学校6年時及び, 中学校3年時の田中ビネー知能検査とS-M社会生活能力検査の結果は, Table 2に示した通りである。

3名のうち, 精神年齢が上昇しているのは, M. NとH. Tの2名であり, それぞれ1歳と2歳の増加であった。T. Mの精神年齢は, ほぼ横ばい状態であった。

社会生活年齢(SM)は, この三年間で, T. Mが約2歳半, M. Nが約1歳半上昇を示した。しかし, H. Tは, 約1歳下降した。Fig. 1には, 1983

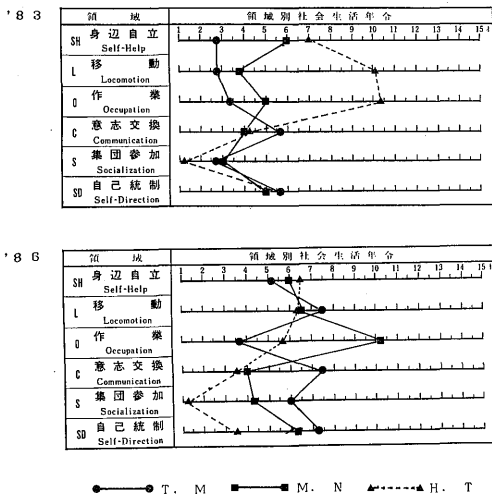


Fig. 1 対象児の領域別社会生活年令プロフィール

年と1986年の領域別の社会生活年令の3人のプロフィールをそれぞれ示してある。T.Mは、「作業」を除く全領域において伸びており、特に「移動」に関してその伸びが著しい。M.Nは、「身辺自立」、「意志交換」においては、3年前とほぼ同レベルであるが、「移動」、「作業」において格段の成長を遂げている。H.Tは、「意志交換」、「集団参加」が3年前と同じであったことを除けば、他の4項目は、いずれも下がっており、特に、「移動」、「作業」の項目の下降が目につく。

(2) 中学3年時の状況

① 動作性知能検査

結果は、Table 2に示した通りである。傾向として、T.Mは、田中ビネー検査と、動作性知能検査の開きはさほど大きくないが、M.N、H.Tは、動作性知能検査の間でも精神年令の差が2歳半から3歳程度ある。一方動作性の検査であるDAMは、田中ビネーとの差が2カ月から約1年と、PBTと比べて関連性が高かった。

Table 2. 対象児の検査結果

対象児	CA	田中ビネー				社会生活能力				PBT		DAM	
		'83	'86	'83	'86	'83	'86	'86	'86	MA	IQ	MA	IQ
T.M	15:08	6:06	50	6:08	43	3:08	28	6:01	39	5:07	35	5:07	35
M.N	15:00	2:01	17	3:04	22	4:06	36	6:01	39	6:01	41	3:06	23
H.T	15:03	3:03	26	5:02	34	5:06	44	4:03	28	9:02	60	6:04	42

② インタビュー

ここでは、各対象児について個別に示す。なおT.M、K.Yについては、母親からの聴取、M.Sについては、担任教師から、M.N、H.Tについては、母親、教師の両方からそれぞれ聴取した。

(T.M) 特殊学級在籍 [母親]

3学年で9名の特殊学級に在籍している。自らクラス委員に立候補するなどの積極的な行為が見られた。自発的な会話は家庭に比べると少なく、また学校での友人も少ない。母親は、中学校に入ってから学校の活動は、以前に比べて消極的になったとの印象を持っている(現在の担任は特殊学級での経験が浅く、母親はこの点に関して不満を持っている)。また最近の対人面における変化として、女性を意識してきたことが挙げられる。

家庭では、一人っ子のせいもあるのか母親に対してわがままな行動が多い。休日や帰宅後は、ファミコンや時刻表、野球の本を見ていることが多い。進路に関して、親は以前就職を希望していたが、適当な就職もないため養護学校の高等部を希望している。

現在自閉症状はかなり改善されてきているが、視線回避、場面適応に時間がかかりかかる等の問題が残っている。

(K.Y) 私立中普通学級在籍 [母親]

1クラス27名の男子校、学業成績は、英語、美術、音楽が中位であることを除くと、ほとんどが下位である。しかし、授業・生活態度はいたって真面目であり、交友関係も、クラブ(図書部)を中心として比較的良好である。

以前、自閉児の兄が本児に対して暴力を振るうことがあり、兄に対して恐怖心を抱いていたが、最近はその傾向もなくなってきた。休日は、友人と一緒に、あるいは一人で映画を見に行ったり、レコードを借りてきたりする。また、新聞も社会欄などを読んで、内容について親と話をすること

がある。

現在いる学校には高等部があるため、両親、本人ともに高等部への進学を考えている（希望者は、全員進学可能）。

自閉症状はほとんど見られないが、真面目過ぎる融通がきかないこともある。

(M. S) 普通学級在籍 [担任教師]

1, 2年時と比較すると目立った行動が少なくなり、全般的にクラスにも同化してきた。しかし、挙手して答える場面になると、自分が指されるまで大声で返事をし続けることがある。学業成績は、主要5教科については、比較的良好で、600人中100番以内である。特に、社会科の歴史分野の知識などは、本人の興味ともあいまって教師が舌を巻くほどである。これとは対照的に、技能教科と呼ばれる科目は苦手で、特に保健体育（実技）は非常に不得手とする科目である。教研式知能検査では、知能偏差値が66であった。

クラス内での対人関係を見てみると、積極的に会話は行いが、一方的に会話を進めることがあり、級友がそれに合わせている感じである。また、女子生徒に対する関心が奇妙な行動パターンとなって表れるようになってきている。例えば、女子と会話する時顔を異常に近づけたり、肩を並べて歩いている女子の間から顔を覗かせるといった行動がそれである。

卒業後は、両親、本人ともに高等学校普通科への進学を希望している。

(M. N) 特殊学級在籍 [母親, 教師]

小学校時より、少人数の特殊学級で生活しているため、担任（複数）及び、特定のクラスメイトとの相互交渉は可能である。表出言語の頻度の低さ（1～2語文がほとんど）や、語彙のレパートリーの狭さから1日の言語的相互交渉の絶対量は非常に少ない。また、他者からの話しかけに対する反応のほとんどはエコリアである。嫌な場面から逃避するために自傷行動を行うこともあるが、1, 2年の頃より減少している。また、下校時に雑誌などを本屋から持ち帰ることがあったが、買物の練習を根気強く行った結果、現在ではみられなくなっている。

家庭での余暇は、好きなカセットテープを聞いたり、本、新聞、雑誌等を見て過ぎすことに当てられている。また、学校であったことを聞くと、体育や給食について正確に話してくれることがあ

る。

卒業後について両親は、家業（印刷業）の手伝いをさせることも検討したが不可能と判断し、現在では養護学校の高等部への進学を希望している。

(H. T) 特殊学級在籍 [母親, 教師]

3学年6名のクラスで、個別指導及び小集団指導を受けている。学校においては、黒板に給食のメニューを書くという仕事を忘れずに行う。子供同士のかかわり合いにおいては、以前より本児の方から近づいていくようになったが、その頻度は少ない。また、特定の教師（男）にベタベタしたり、女の人にやや敏感になりつつあるといった傾向もみられる。しかし、対人関係においては、基本的に大きな変化はない。

日常生活では、100円ほど渡されると店に入ってお菓子を買ってくることができる（店に行ってお金と物を差し出す）。また、自転車に乗って町を走り回るのが趣味である。

両親は、本児の就職については、時期尚早との考えを持っており、他に行くところも見つからないため、卒業後は養護学校高等部への進学を希望している。

5. 考 察

以上、諸検査及び親・教師に対するインタビューによる情報収集の結果を述べた。これらの情報をもとに中学3年時の学校適応、日常生活及び、対象児の措置について検討を加える。

(1) T. M

精神年齢は、小学6年時とほぼ同じレベルであり、検査間における相関も他児に比べると高い。社会生活年齢も3人の中で最も低かったが、今では精神年齢相応になってきた。また、クラス委員に自分から立候補するなど積極的な対社会的行動が出てきたことは、特筆すべきであろう。このようなT. Mのポジティブな変化にもかかわらず、母親が、中学校でのT. Mの様子に首をかしげる背景には、教師に対してわだかまりをもっていることがあるのかも知れない。

積極性や社会生活能力が育まれている一方で、視線回避、対人関係の広がり方など、まだまだ改善されるべき問題が残されている。また、女性への関心が、本児の有する全般的な行動上の問題へどのような影響を及ぼしていくかということは、興味のある問題である。

この3年間での本児の着実な変化を考慮すると、特殊学級への措置は適切なものであったと考えられる。

(2) K. Y

このケースは、母親が、就学前に本児が治療教育を受けてきたことを中学校の学校関係者に告げずにいたケースである。

母親の話によると学業成績は、余り芳しくないものの、生活、授業態度は良く、交友関係も比較的良好で、友人と映画を見に行ったりするなどの行動がみられる様子である。

中学卒業後は、系列の高校に進学し、その後は、本人と相談の上で、大学あるいは専門学校への進学を考えているようである。

加藤ら(1985)は、普通学級への参加が本児にとって必要であることを述べているが、本児の対人関係の進歩、両親の進学への希望等考えると、私学の普通学級へ在籍させたことは、正しい選択だったと思われる。

(3) M. S

本児は、これまで行われてきた追跡研究において、アカデミックスキルが5人のうちで最も高いと報告されてきた。そのことは、今回行われた担任教師とのインタビューにおいても裏打ちされた。現在普通学級に在籍しており、主要5教科に関しては600人中100番以内という成績である。

本児は、学業成績においては優秀ではあるが、一方的な会話、女子生徒への奇異なかかわり方など対人関係において問題を抱えている。

本児の知的能力に関する高いパフォーマンスを考えると、現在の措置は妥当であると考えられる。しかし、福井ら(1986)の記述同様、今回も集団場面、対人関係において問題を指摘することができ、社会的に認められる対人行動スキルを学習させることの重要性が示された。この問題が、本児の成長に従って今後どの様な展開を見せるのかは興味のある問題である。

(4) M. N

本児のここ3年間の変化を見ると、精神年齢が1歳3カ月、社会生活年齢が1歳7カ月に上昇しており、遅い歩みではあるが確実に成長している様子がうかがえる。本児が田中ビネーやDAMに比べて、PBTにおいて高い成績をおさめているのは、本児の視覚モダリティーの優位性を示唆するものであるかも知れない。

自傷行動や、下校時に本を持ち帰る等の問題行動は、母親の努力もあって減少する傾向にある。

学校においては、特定のクラスメイトとは相互交渉が成立する。このことから考えるとコミュニケーション手段が未開拓である本児にとって、まず小集団から対人関係を形成しようという試みは、有意義であったと考えられる。以上のことから本児の特殊学級への措置は適切であったと思われる。

(5) H T

精神年齢の上昇とは反対に、社会生活年齢は、1歳3カ月の退行を示した。しかし、今回の調査では、その要因を同定することは不可能であった。

対人関係において大きな変化は見られないが、女性への興味がでてきており、これがT. M同様対人関係へどのような影響を及ぼすか興味が持たれる。

今回の調査からだけでは、本児への措置の適否について言及することはできなかった。

6. 今後の課題

本研究の初めにも少し触れたが、この5人のケースの追跡研究が始まって10年が経とうとしている。その間彼らの年齢は、幼児期、児童期、青年期のそれへと移行していった。それに従い当初使用していた検査類や質問項目等は、彼らの実態を把握するためには不適切になりつつある。今回明らかになったように、彼らの性的な目覚めに関する問題や、高校・養護学校高等部卒業後の進学、就職の問題、職場での適応状況の問題、といったこれまで取り組んできたものとは異なった問題に取り組んでいかなければならない。今後は、これらの問題の存在を念頭に置きつつ本研究の意義、具体的な研究方法について検討していく必要があるものと思われる。

文 献

- 1) 加藤哲文他(1985): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VI(3) 自閉症状の消失した障害児について、心身障害学研究、9(2)、49-56。
- 2) 小林重雄(1977): グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック、三京房。
- 3) 小林重雄編著(1980a): 自閉症児、川島書店。
- 4) 小林重雄(1980b): 自閉症、岩崎学術出版。
- 5) 近藤明子他(1979): 自閉症状を示した障害児

の学校適応に関する追跡研究 I (3) 自閉症状の消失した障害児について, 心身障害学研究, 3, 121-134.

6) 福井ふみ子他(1986): 自閉症状を示した障害

児の学校適応に関する追跡研究VII(3)——自閉症状の消失した障害児について, 心身障害学研究, 10(2), 97-105

Summary

The Follow-up Studies on School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms VIII(3) —on Whose Diagnostic Label Corrected—

Syoji Higo Tetsubumi Katoh Naoko Fujita Shigeo Kobayashi

Five handicapped children who had been diagnosed as Autism by other institutions and their autistic symptoms had been improved on the process of behavioral therapeutic approach during infancy, were selected as subjects in the 9th-year follow-up study.

Three subjects were attending at the each special class, and two were at the each regular class.

The purpose of this study is examining the appropriateness of attending when they were junior high school. For this purpose we used four tests (Tanaka-Binet Intelligence Test, PBT, DAM, and The S-M Social Competence Test). Interviewing records with their mothers and teachers were added in elaborating with the results.

The results were summarized as follow.

- ① Two subjects who were attending at the each special class, and one who were at the regular class, were judged as appropriate.
- ② It was suggested that another subject who were at the regular class needed the training programs for proper human interaction.
- ③ Regression in Social-Competence were observed with another subject who were at the special class. But, we were not able to describe of the factors with its regression accurately.

Key word: autistic children, follow-up study, school adjustment, behavior therapy